



追悼

杉村宏先生の思い出

日本女子大学名誉教授

岩田 正美

本学会名誉会員であった杉村宏先生が2021年10月29日に逝去された。そのことは、1週間ほどたってから、北海道大学の松本伊智朗さんのメールで知った。このところご自宅で間質性肺炎の療養に努められていたので、お目にかかることもなくお別れすることになったのが誠に残念である。何年か前に、研究会の後品川駅で向かい側のホームから、少し酔いの残る体をゆらゆらさせて、いつまでも大きく手を振っていた先生の姿が最後になってしまった。ほぼ1年前に書き残された『生きるということ：私家版－生きる意味を公的扶助ケースワークに問う－』（萌文社）によれば、先生は1940年生まれだそうだから、81歳の生涯であったことになる。

杉村先生と初めてお会いしたのがいつだったのか、よく思い出せない。私の恩師・江口英一先生は「社会調査屋」を自任され、毎年いくつもの調査をやっておられたが、その実査に必要な「人手」として、周りにはいつもいろいろな研究者や実践家、学生が集まっていた。杉村先生は日本社会事業大学が大学になった時の1期生で、非常勤講師として社大へ行かれていた江口先生に貧困論の授業を受け、ついでに全日本自由労働者組合（全日自労）の調査員として「調達」されていたらしい。その後、籠山京先生、江口先生に次いで、北海道大学教育学部に赴任されたので、江口先生との縁はより強くなっていたと思う。つまり、私にとっては江口組のいわば「兄貴分」にあたる方々のお一人で、いつのまにか「タメロ」で話すほど親しくさせていただいていた。

杉村先生が日本社会事業大学に入学されたのは、家が近かったからだそうだが、当時の社大は原宿にあったのだから、先生は東京のと真ん中で育ったわけだ。教育令公布以前の1876年に設立された千駄ヶ谷小学校卒である。学会が上智大学で開催された時だと思うが、北大の院生たちは東京を知らないから、赤坂離宮の方へ連れて行くと言っていたから、多分その赤坂離宮と対をなす東京のスラム（四谷鮫ヶ橋）あたりの歴史を見せたのではなかったかと思う。

きっぷの良さ、美味しい物好き、人懐っこさは、先生の江戸っ子気質に由来していたのだろう。研究会の後には必ず飲み会があり、先生が吟味した店へ繰り出すのであった。酒好きだけでなく、甘いものも好きで、虎屋の羊羹は1本丸ごと食べると言って皆を驚かせた。ある時、北海道でお鮓を食べるとしたらどの店が良いかと気軽に聞いたところ、急に真面目な顔になって、予算次第だけれど、本当に美味しいところへ行きたい？と聞かれて逆に驚いた。もしかするとすごいところへいかれていたのかもしれない。家計調査のコーディングのために三浦半島で合宿した時、終了後に皆で三崎へお鮓を食べに行っていたことがある。すると先生は「貧困研究してるのに、うまいもん食っていいのかな」と呟いた。このような感覚は、先の『生きるということ』にも示されている。江口先生が「人間の不幸にだけ目を向けていたい」というオルテガの言葉に触れて、そうありたいと自分も思うが、どうしても自分の楽しみに目がいってしまう、と言っておられたと書かれている。杉村先生は、戦後新設された福祉事務所のケースワーカーとして就職され、それ以降公的扶助ケースワークを追求されてきた方であるから、一方で

具体的な貧困や不幸に怒り、それらと格闘してきたわけだが、他方で美味しいものと聞くと思わず身を乗り出すような、誠に人間らしい方であった。それが学生への優しさにもなって、多くのお弟子さんが育ったのではないだろうか。

先生ご自身は、ご自分の研究や実践の中核として「公的扶助ケースワーク論」を挙げておられるのは当然であるが、貧困などという言葉が何処かへ行ってしまった時期にも、北海道で地道な貧困調査を継続され、そこから貧困研究を志す方々を多数輩出されたことが最も大きな業績ではなかったかと私は思う。なお、先生は字も絵も上手で、先生から葉書をいただくと私は自分の悪筆を呪うのだった。『生きるということ』には素敵なスケッチが沢山配されている。表紙には本格的な珈琲グラインダーの絵があり、北大の研究室でご馳走になった美味しい珈琲が思い出された。それで思わず山谷バツハの珈琲を勝手に送りつけたら、すぐ電話をいただいた。その時は、大きな声でお元気そうに思えたのだったが……。

思い出を綴っているとキリがないが、最後に杉村先生の学会への貢献について記しておきたい。杉村先生は社大1期生であるから、社会福祉に対する愛情は私などとは比較にならないくらい大きかった。とりわけ、仲村優一先生への尊敬の念や社大への特別な思いを持っておられた。北大時代には、北海道社会福祉学会（北海道部会）で活躍され、2004年に出版された『社会福祉学研究の50年—日本社会福祉学会のあゆみ』の編集委員の一人として、1956～1964年の「初期の学会活動」の章を担当されている。「国民皆保険・皆年金体制」の発足、福祉六法時代への移行がなされるこの時期は、他方で生活保護への適正化から朝日訴訟に繋がり、公的扶助ケースワーク論争やボーダーライン層研究のあった時であり、また学会がその共同研究の成果を『日本の貧困』として世に問うた時でもあった。この時期の執筆者として杉村先生はまさに適任者であったと思う。